



最明寺殿教訓のふと

全



景明寺啟教訓

策進堂

藏梓
直子源

之

叙

廣容人言者昌。不容人言者衰。是以舜取於人。禹拜昌言。夫人之處世也。宛如立品上也。一步少過則落。豈徒萬丈。又從而墮無間矣。余夏日曝書之餘。得之篋中。蓋平時賴禪門訓。其子時宗書也。把而讀之。其所言者。雖至近。而其意標出於經史百家之急於脩身齊家者。而換骨深遠有味。目恐其散逸。手寫一本。以上梓。至如審定之。則余亦與白石老人頗同調。

序



也。彼の中法、有圈點者。乃老人之遺意。而有
跋附後。若有廣容人言者。來夫取之。容言則安。
舍人則亡。必矣。丁未嘉平月

後學悟衆序於朱愚白痴觀并書

悟衆



最明寺教子息時宗一教訓のふし

四十有八條

それ親と名を子と名をる。前世は親とあさかづに扱も世
此間乃ちあさき夢のうちれど。昨日み一人けなく
今日ハいさきともあすとのまづ朝乃日暮れ山乃端は消
ゆづの月は曉とかがきまされば老く親とさきづて子
のとまづハ順次なれども生死れあうひなまは若きとて
ふしのみづる。いかに人ふ志はまじくまづるものと
あましくまづる。さかやうのる向ひなまてやせん。

きげんえうのがくく修きむかひれどとくぞ志ぬ一層
あり世は為君乃あ心も才にもふれまひまを君
老が本望しおるべきとや

佛神を朝夕あがめまふべきとや夫神は人のうやま
ひによりて威をまう人の神の徳ふよりて運をまう
なまば専ら正直を宗とて神明佛院を信ずべし今
生より福壽増長に恵にあたり後生ふてはあふ
世に生れべしよく心あふまふべきなり

出家を志するはよく心あふまふべきなり出家誹謗ハ佛神

よ里血をいふはひとしきば今生にてハ佛神の
加護もき未来にてハ鉄地なりて舌をぬれ只
一切れ出家よまかひては其人の善悪目をかけん
して生身れ釋迦如來とやまうべし此旨經論
乃談説するあきらまみえし
いろよき花をみてハ手おらず佛神ふまうせむや
とおもひまうべしとハ佛神乃佛前あらず
とも此いろがけあおるべきとやあながちよまう
せておとれるはあきらまみえし

聴聞^{きやうもん}れな^まにてさえぐくふれま^まぶ^ぶる^るを^を志^し
はめて志^しも眠^ねれ^るず^ずけ^けぐ^ぐさ^さ人^{ひと}を^をう^うけ^け逢^あ
ぐ^ぐて^て佛^{ぶつ}教^{きやう}を^をあ^あし^しを^を教^{きやう}る^る音^{おん}を^をれ^れ浮^う木^きに^にあ^あて^て
か^かと^とし^し志^しる^るを^をさ^さう^うぐ^ぐく^くふ^ふま^まひ^ひり^りれ^れそ^そあ^ある^るあ^あ
人^{ひと}乃^{なり}と^とる^るを^をさ^さう^うみ^みず^ずこ^こと^と人^{ひと}口^{くち}乃^{なり}耻^ちあ^ある^る冥^{みやう}慮^{りょ}の^の
木^きを^をさ^さう^うに^にし^し

女人^{にょなん}の^の五^ご障^{しやう}三^{さん}從^{じゆう}て^て男^{なん}子^しに^にま^まさ^さり^りて^てふ^ふう^うつ^つみ^みあ^ある^る
志^しり^りと^とい^いづ^づも^も八^{はつ}歳^{さい}に^に龍^{りゆう}女^{にょ}の^の法^{ほふ}華^か乃^{なり}利^り益^{やく}よ^より^り
て^て南^{なん}方^{ほう}無^む垢^く世^せ界^{かい}に^に生^{せい}れ^れ韋^い提^{だい}希^し夫^ふ人^{にん}の^の彌^み陀^たに^にあ^ある^る

願^{ぐん}を^をさ^さう^うて^て西^{さい}方^{ほう}安^{あん}樂^{らく}淨^{じやう}土^どに^に注^{しゆ}生^{せい}を^をう^うけ^けら^られ^れ誠^{まこと}に^に女^{にょ}人^{にん}
い^いら^らる^るあ^あさ^さき^きに^によ^よつ^つて^て出^で離^り乃^{なり}縁^{えん}を^をい^いづ^づも^もこ^こら^ら
寸^{すん}を^をさ^さう^うて^て後^ご生^{せい}を^をね^ねぐ^ぐふ^ふもの^{もの}あ^ある^るば^ば韋^い提^{だい}希^し天^{てん}
人^{にん}れ^れど^どく^く淨^{じやう}土^どに^に生^{せい}れ^れて^てい^いづ^づも^もこ^こら^ら

奉^{ほう}公^{こう}を^を志^しす^す人^{ひと}乃^{なり}と^とる^るに^に持^{もち}て^て見^{けん}識^し乃^{なり}人^{ひと}の^の志^しを^を
づ^づく^く只^{ただ}君^{きみ}を^を一^{いち}大^{だい}事^じと^とも^もひ^ひを^を命^{めい}を^をか^かる^るん^んど^ど財^{さい}
寶^{ほう}を^をも^も惜^{おし}む^むが^がい^いづ^づも^もと^とい^い君^{きみ}れ^れは^は心^{こころ}を^をも^もて^てお^おも^もひ^ひ
意^いを^をさ^さう^うて^て佛^{ぶつ}天^{てん}の^の忠^{ちゆう}孝^{かう}乃^{なり}道^{みち}を^を守^{まも}り^りま^まは^はそ^その^の
志^しを^をあ^ある^るが^がい^いづ^づも^もは^はみ^みや^やに^にお^おも^もふ^ふも^もひ^ひと^と一^{いち}り^り

只行ひを心づゝまづ一無奉公にては恩はあはれ
 んとたまた舟なかりて大海を漂ふとするか如し
 親の教訓を聖母にまねてまづべしうなれおや
 ありともまづあしとおもふあはれがふらふを
 志せぬ眼をふさぎよくしれと案ずるに子とみ
 てなげん親れはいふむかりなれづやとひ比が
 ことをのこまふとれは志づひていづまふるところ孝
 子れまひとけりあき年とけよをひくふと願ふ
 波をよせ眉に雲をよせ腰をたあはせれりとを鏡

のが^{せう}自^じら^らす^すま^まだ^だく^く心^{こころ}ひ^ひが^がみ^みて^て言^{こと}葉^は一^{いつ}も^もね^ねば^ばら^ら
 ふ^ふぶ^ぶぶ^ぶる^るを^をう^うろ^ろみ^み恨^{うら}む^むぶ^ぶる^るを^をよ^よろ^ろふ^ふ皆^{みな}老^{おい}ら^ら
 人^{ひと}乃^{すなは}智^ちひ^ひあ^あり^りい^いの^のを^をし^しと^とお^おも^もは^はて^て志^しを^をぐ^ぐぶ^ぶー^ー過^すぎ^ぎり^り
 か^かゝ^ゝ久^{ひさ}く^く行^{いく}末^{すえ}い^いや^やう^うく^くち^ちり^りけ^けき^きば^ばい^いま^まく^くは^はど^どろ^ろ添^そ
 奉^{ほう}教^{きやう}ぶ^ぶと^とお^おも^もひ^ひて^て立^{たち}居^ゐは^はけ^けて^て孝^{こう}養^{やう}は^はら^らを^をす^すべ^べ
 一^{いち}若^{わか}又^{また}人^{ひと}を^を教^{かう}へ^へて^てひ^ひび^びみ^みく^くま^まを^をさ^さげ^げん^んを^を伺^{うか}ひ^ひあ^あじ^じあ^あ
 い^いま^まを^をん^んふ^ふな^など^どう^うい^いが^がい^いと^と乃^{すなは}あ^ある^るぶ^ぶら^らい^いは^はを^を習^して^てま^まる^るべ^べ
 ち^ちい^いま^まは^はい^いふ^ふと^とい^いふ^ふか^かり^りも^も隠^{かく}ひ^ひな^なま^ま教^{かう}べ^べー^ー
 人^{ひと}に^にち^ち交^ま互^たい^いし^しま^まを^をん^んり^り日^ひ通^とす^すう^う松^{まつ}と^とあ^ある^る人^{ひと}を^をバ^お親^{かみ}と^と

おもひまゝにやとて弟とおもひはおもひなりとては子とおもひ
てかりをぬくにもいふをひくかふるなりききとはとてを
おもひまゝに人乃とてをぬく一もまゝに君もとのけり
はあまれみもまゝにひ人もかあらじ敬れらる
をおもひまゝに

道理れ中のひくことひくことれなるの道理とやするあり
まは道理のなれひくこといふにまゝに道理なり人
乃とてみ害にもおもひまゝにほとれりとなりまゝにひの
なりまゝにやこれのりて人をまゝにれを道理れなる乃

ひくことやまゝにや又人乃一命をまゝにまゝにやとて
まゝにまゝに助けれをひくことれ中の道理とや
まゝにおもひまゝに佛菩薩は無縁の慈悲をまゝに平
等利益をほとてまゝにまゝにたればまゝに心すな
をまゝに人をまゝに世を憐れみちと守りまゝに
のまゝに苦難ものぞき所れもかちひまゝにことなる
れまゝにまゝにや

心をまゝにまゝにやまゝにまゝに人乃教訓まゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

さればある文は十人の言葉ふあひがらばよきもの十あり百人の
羽は三つよきもの百あるといふ又老子經は心は水乃
器ふあひがよきものといふみえり誠は日が必とすべ
て人の言葉をあざけるものなりさく次あり
ことひこれこそ其道にうとといふもの經論も明
文字も達者ある人なれどもちうはるあへて
一句乃道理をもさへしなむはかづる智慧をも
得しものなり

出仕の折ふいでちもふづる衣裳はるよき人

交りてもいやりき人はまづあらてもすのひいでず
みぐれかぬやうなにていでもちまふなり
侍や主人の為は勤めあるものあらばとせられしもの
いよく奉公をすべしゆめかきを朝王おとあむ
るなる自然侍軍れはことと主人仰せしもの
ことあらば主乃すげんとすまふものなりやあす
一市並は心よしがふるあきぬものちよひ必よきもの
と思ふなり凡人乃ういひをすていらすひよりこび
やもしてはよりふられど古賢乃教をまよふもの

人たう志乃ごとくめく宮よりぐんぐんとひよきくるあり
 こころはよくて無益な里までかゝるもあゝさうを
 いひはかして其人よりかき長き世の恨を蒙りてこれ所
 得何るぞやふ其人はあううさうさうとも市を
 つたうする中よりいあらん人ハ必しぐ上ともかくい
 ひてんとおもたまふる大あるゆゑいづちや冥途にて
 ハ鉄丸をのこ舌をぬかれて多生劫にたうりなり若
 きとよくあるひと一人を尋ねしつゝを報ずるに

腹^{はら}は^らん^ん時^{とき}石^{いし}は^はもの^{もの}の^のあ^あう^うと^とて^て口^{くち}ふ^ふま^まう^うせ^せて^てさん^{さん}ど^どよ^よ乃^の、
志^し望^{ぼう}又^{また}い^いさ^さう^うれ^れち^ちび^びを^をい^いひ^ひて^て、鼻^{はな}を^を流^{なが}く^くる^るあ^あう^う
通^{とお}る^る、時^{とき}か^かれ^れか^か過^する^る、よ^よき^きう^うれ^れお^おも^もひ^ひで^でる^るま^まま^ま

いふ面をいふことかゝるあるれば俄にさへさへ乃
いでくものあり或文は科の重きをいふて功なり
いふを賞せよといふ里にふはくふふふふふふふふふふ
すれなり前世戒力なりいふをいふるに我といふ
まゝと釈あり此ことを思ひていふをいふかけ
いふふふふ但し差違ふる罪科をいふていふてい
を招くものいふていふていふていふていふていふてい
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

我下人と人乃下人と争論すること同一ほど乃道理あり

いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人

我を教ふ人いふ人我その人より教ふ人いふ人いふ人

いふ人教ふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人

いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人

いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人

いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人

いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人

いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人

いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人

いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人

むすぢり上ハカ乃狂人^{まやうおん}ひとく伴^{とも}ふとも下^{しも}にひる^{ひる}を
ひと^{ひと}かま^{かま}もちぬき^{ぬき}はひる^{ひる}ハあ^あぬ^ぬづ^づび^びより^{より}乃^乃と^とぞ
ま^まひ^ひは^は大^{だい}酒^{しゅ}大^{だい}狂^{きやう}よりこそお^おり^り傳^{でん}ふ^ふあ^あし^しき^き人^{じん}大^{だい}人^{じん}の^のひ
か^かる^るハ威^い勢^{せい}に^にお^おり^りて^て口^{くち}を^を閉^とぢ^ぢる^るも^もは^はら^らへ^へ不^ふ肖^{せう}れ^れ人^{じん}
乃^乃狼^{ろう}藉^{せき}ハ^ハみ^みゆ^ゆれ^れ寸^{すん}人^{じん}な^なけ^けき^きば^ば帝^{てい}座^ざの^の礎^そハ^ハ及^{およ}び^び里^りより^{より}ヤ
と^とて^とお^おも^もひ^ひみ^みえ^えん^んと^とす^すが^が長^{なが}く^く家^けの^の名^なを^をき^きひ^ひを^を惜^お
み^みて^て命^{いのち}を^をか^かろ^ろく^くす^すが^が死^して^てせ^せん^んな^なさ^さみ^みち^ちあ^ある^るそ^その^の時^{とき}耳^{みみ}
に^につ^つて^てあ^あと^とと^とく^くあ^あん^んよ^よう^うも^もじ^じぶ^ぶと^とひ^ひれ^れま^まは^はに^にす^すこ^こん^ん
と^とを^をか^かん^んぢ^ぢみ^みて^てさ^さふ^ふう^うふ^ふう^うあ^あう^うし^し

人^{じん}乃^乃所^{しよ}ハ^ハゆ^ゆき^きし^しん^ん時^{とき}と^とひ^ひか^かる^るさ^さう^うと^との^のよ^よと^と
も^もの^のひ^ひま^まよ^よう^う人^{じん}の^のぞ^ぞき^きん^んと^とな^ない^いま^まよ^よう^うた^たあ^あれ^れ
と^とて^と望^{ぼう}よ^よう^う目^めを^をけ^けあ^あや^やー^ーげ^げふ^ふま^まを^をみ^みる^るあ^ある^る
べ^べか^かる^る人^{じん}

人^{じん}の^の親^{おや}子^こに^にお^おく^くれ^れ妻^{さい}女^{にょ}は^はえ^えな^なれ^れて^て歎^{なげ}く^く所^{しよ}ハ^ハさ^さう^うと^との^のや^や
は^はう^うい^いま^まよ^よう^うさ^さう^うな^なれ^れ只^{ただ}お^おは^はけ^ける^るふ^ふま^まて^て道^{みち}
を^を尋^{たず}ね^ねて^てい^いま^まさ^さく^く誠^{まこと}小^こ家^けれ^れ燈^{とう}明^{めい}世^よれ^れ寶^{たから}と^とあ^ある^るふ^ふま^ま
べ^べる^るもの^{もの}と^とや^や

我^{われ}用^{もち}を^を去^さて^てる^る人^{じん}乃^乃用^{もち}を^をさ^さう^うま^まよ^よう^う又^{また}事^{こと}か^かけ^ける^るふ^ふ
九

念^{ねん}なり志^しおめせてうちより進^{しん}むそのまゝおち入^いり
まてびかきまゝかゝうとあつてとらふ^{とらふ}留^{とど}のちひ互^い
うちつゝ進^{しん}子^し孫^{そん}こつゝ教^{きやう}まで怨^{えん}念^{ねん}を結^{むす}び修^{しゆ}羅^ら
此^こ昔^こをうけて輪^{りん}廻^{かい}極^{ごく}里^りありいあらん人^{ひと}いうで^で是^{これ}を
歎^{かな}ふ^ふ歎^{かな}ふ^ふやうとひ人^{ひと}う^うをくして我^{われ}お^おを思^{おも}ひ
志^しづとつゝもわくこ惜^{おし}とわめ^めて只^{ただ}牙^がを憤^{ふん}み
道^{みち}を守^{まも}りいふは^はすまふ^ふよる^る乃^{すなは}煩^{わづ}ひは^はまづ^づび
其^{その}間^{かん}は^は彼^か人^{ひと}心^{こころ}を^を氣^きれ^れく^くと^とあ^あづ^づ—[—]す^すづ^づハ^ハ等^{らう}
せ^せず^ずて^て辭^{ことば}を^を志^しを^をど^どく^くる^るま^まの^のこ^こと^とを^をバ^バ得^えく^くま^まよ^よ

け^けき^きよ^よの^のお^おも^もひ^ひめ^めづ^づす^すづ^づと^とあ^あり

人^{ひと}乃^{すなは}方^{はう}より便^{べん}を^をき^きて^てよ^よむ^むお^お、[、]あ^あら^らん^ん時^{とき}は^は志^し

し^しの^の中^{ちゆう}あ^あり^りと^と先^{まづ}一^{いち}度^どハ^ハ料^{りやう}酌^{しやく}あ^ある^る—[—]そ^その^のお^おは

便^{べん}自^{みづか}然^{ぜん}志^しや^やう^うい^いち^ちを^を門^{もん}達^{たつ}な^など^どす^する^るあ^あら^らバ^バ行^{ぎやう}か^か

呈^{てい}て^て人^{ひと}も^も迷^{まよ}惑^{ごつ}—[—]我^{われ}も^もあ^あら^らん^んば^ばく^くを^を失^しふ^ふま^まづ^づか^から^らぬ

て^て便^{べん}を^を得^えて^て一^{いち}定^{てい}を^をき^きづ^づ—

物^{もの}を^を買^かひ^ひま^まし^しの^の代^{だい}を^を一^{いち}度^どハ^ハ了^{りやう}す^す—[—]高^{かう}う^うハ^ハ買^かづ^づら^ら

は^は言^{ごん}葉^{えつ}を^を流^{りう}く^くさ^させ^せて^てか^かす^すら^らい^いや^や—[—]さ^さへ^へる^るあ^あり^り高^{かう}人^{じん}

を^をち^ちが^がる^るこ^こと^とえ^えぐ^ぐお^おり^りし^しこ^こと^とあ^あり^り

まは後世れはとあをいふさんとおもひしは志あるは
念佛持經座禪の中は心は相應志とくと思ひしは
ち一行をとくおとくは終ひしはま出離解脫
疑ひあはれがう男やくもあなごるけしなく是
よおぢおそれふれぬよくまゐりて公私とさぐも男
をも人を用ひしは男乃はうき心ずおとくもあながち
ねも恨むるなれ長き世乃終とくのもむるも一夜
にかぎりて後初の思ひとなすも老れ後までともな
る誠は夫婦れ中どく是唯過去乃宿あり

今生一旦乃るうまはるは凡夫婦れ中かぎり人間
のありさまをせよ兄弟骨肉乃あきくくすを
ども讎をむすひ讎をうつゝあるもあり又此紫の
人棟男乃始て對面しそのまゝいひかきして水とさ
ぬ不どに替るも多し誠はさぐあなすは此世れあり
ひ頼ぐくは人乃心あり是まつけても佛より外は頼
奉るるありしひすうまを誓願するを信し
まは佛は三明白通れ真人よりまはせはあきうま
乃心とちうせしはひて願のいくま我をたまはれ

人も見物顔より對してすれうらみをいひて京鎌倉より
うづらの志望してほつて見ると敵人のやうな悪名
としてま行ひ人の悪人の詞をいやくし勝をかめ
ておぢいあつたさあやみぐるーとつたお
ろちやうせめて人間の目志のびあん諸天善神
はかるものを増えしやあれは子孫とて冥加あり
ちんや聖人の末行をおととやて悪事れす
らぶるやうなふれまうとちうつとびいいて始め
是を對治せんとするはれろちうづつとすあつた

すい家の惣領をいふも人より親類を助け方
よかていかまうよとつてあやうなとおひ度子
と人あつた風をい我いせがんと思ひて教ひ
あつたよーとつて佛神は心よかちん月
ひらけいよよー
思ひの外なれうれいいてるものあつたあちや
らしをなげくうらなるも前世の宿業と對め
いふよーとつて歌よ

浮世はかきとてこれおまけは理志ぬ我涙哉

主人乃貴命なりとも人よりられまじきほどのものとい
かなるぬまでもあらむいづれめやまづー南座の^{みけ}色
あはれづるはみ減れ思ふべしなり
無方とも人の衣裳食物をまづめ武器財をどつ
けてよきものをといひいづれをいふまづー
づいゝるむあつ只分をとりて世をいとなむべし
こととや

船は櫓^かといふものにて大海をりるなり人いふ直
心もちておれりし世に交れべし櫓^かをりる船

とも大海をりるべしや人いふ直をりる思ひの外ある
横難^{よこがた}いふべしなり

心やすき友もあつとも心まほじれる友いふづる
に自然其人我より争ふるでしつ時いふ心けより
時乃あやむをいひつれものあつよく用いふまづ
べし知て人中にてれ難^{がた}又い時の勢まよひ
か言禁^{かぎん}ありしころ第一のいふなり
酒狂^{さけが}ひすれ人又いれがまゝり人の交りしん所を
透^{すう}を守るおもあつくーてまづいふ

奉公をする人傳事中よりおとあひやうらん人を
うちねみゆるふつけていひ教へまへとよくて契約
立てたりいふやうに

兄弟あまゝあつて親の佛事をいとなむ時或は貧窮
りてかきむす或は孝養れ志すくなくして酒食野菜
以下れをとおろなる人あはれ自給の兄弟不孝なり浅
きなどいひて来集せぬ僧俗乃ち所をもていふ志
をのき口惜するなり世間の親のいふ不孝なる子を
かゝつて不便のいふあひひどく一統は今親れ所

為る佛事をあなづる親乃不便のいふあひ子を
あゝいひていふ志めんと尊霊に對し奉りて
其心少からば深き恩徳をいふまはす報謝れ志
なり人其心其心其心のはりあんとそれかきけき
助成合力はけりてめめ不きといふづかづき

勝負れあひなどまけしん時やがしそれるもの
ひをいふづー又勝負しんと人をせめあひするあはれ
づかづか知して勝負かけものいふるある人のせめと
ふなりしをながるゝ元ふづーまはげのがれさるる

乃阿多むあり

かゝるてハよしもち教人乃俄はよくあつていづれは用
あるとれもひてうちとくづづいといふをいふ
るなくともお節を得て事あるづいふて用で
はるづいふあり

物をいへるゝといふかゝのいふゝあつていふづい
ひあつていふゝ施すゝといふゝいふゝあつてい
の心あつていふゝ

人は物を盗むゝといふゝあつていふゝいふゝあつてい
ふゝ

あつていふゝを殺すゝあつて殺生罪業甚し

づ但し所をいふ國を司る人ゝ殺多生の道理は任て

はるゝあつていふゝいふゝあつていふゝ

百姓あつていふゝいふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ

義あつていふゝいふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ

茶かけ酒をもすゝいふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ

右の賢主いふゝいふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ

いふゝいふゝいふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ

らあつていふゝいふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ

は前内れはぶななどゆめくのぞきみるゝあづるぐ
女房連などの居よまんあよりよて笑ひ残る。
い。こ。な。う。に。は。志。む。づ。ー。く

我身富貴なりて威勢あきまて人をいやりみ
あなどるべからば諸人の憎まれ恨まうくれは哭
難家よすゝるなり

右條に誠の言葉つゝなく理りもつゝいぬるを
志致し傳へおのがまゝと云ひまふべしやれども
まゝするれ。い。先。め。は。あ。い。ま。い。の。ふ。こ。し。れ

て心静は素懐を述がべし是よまゝておろわけ
いとまほれ日志むらく閑所にもまゝ居て日
胸よりくもひふしとおもひつゝ教ふに隠ひ
て志しはけはるなり文章かづるべとて推し
つかうば我むり明師は通付まゝすゝもて
ことなりをいふおろなる人もやわかれやう
うゝ平詞ののがれと云ふなりひとま
志なれをいふあづるいふまひておろも新ひ
人よりいふあづるいふまゝでそれぞ誠なり

なづらん世れつゝもあつ傳ふん

右一帖平時教禪門を訓ありといひて世に傳ふ所也その
あるまじき教ふべきことぬがごとくと思ゆるもすくなく
らば我今一本をうけてかくしは然るまじき傳ふべ我後
乃んこれみまはるべきと思ひぬるよりて書をいれり乃
ごとくものゝまゝにうけて見ゆるんは其の益おなり
べしことし傳ふ 六十七才の翁白石道人識

右は白石先生五世の孫新井某よりひのむで寛政六寅のまゝ馬年



